

荒廃進む里山の資源を見直してみる

里山はこれからの社会の試金石

古来、里山は人々の暮らしを支えてきた重要な資源だった。だが高度経済成長によって、その資源は不要になっていった。里山が荒れている実態は何をもたらしているのか。里山との関係をどう築くか。鎌田磨人さんに聞いた。

徳島大学大学院教授

鎌田磨人

●かまだ・まひと 1961年生まれ。広島大学大学院生物圏科学研究科博士後期課程修了。徳島県立博物館学芸員、徳島大学工学部建設工学科助教等を経て現職。専門は景観生態学、生態系管理工学。

里山は資源の宝庫だった

——里山の現状は、いまどうなっているのでしょうか。

里山は日々の燃料としての薪や炭、農業肥料としての落葉や茅などの採取地として、人の暮らしを維持するために使われてきた山を指します。高度経済成長期以降、私たちの暮

らしは石油や天然ガスのようなエネルギーに依存するようになり、木材など、それまで利用してきた里山の資源は活用されなくなりました。その結果、やがて里山は藪に覆われ、林から森へと姿を変えていきました。その恵みを享受してきたはずの所有者は、高齢化していたり、他の町に移り住んだりしています。また、里山は多くが私有地で、土地の所有

者が管理してきたエリアです。そのため、行政などが「使われていないから」と勝手に売ったり貸したりすることはできません。ですから、たとえば、都会に暮らす人たちが、自然豊かな里山の暮らしにあこがれて移住したいという希望があっても、それに応えられない場合があります。つまりマッチングがうまくいっていないのです。そういう間に

も里山はどんどん荒れていく。これが全国的な里山の現状ですね。

——昨今の空き家問題のような状況ですか？

まさにその通りです。管理しきれないどころか、里山の所有者さえ見

つからないケースも増えています。里山には里山特有の生きものが生息していますが、そのような状況に置かれている里山からは、生物多様性が失われます。藪に覆われたかつての林は人目が届かず、人への警戒心を持たなくなったシカやイノシシが著しく増えて、生息数が高止まりしている状況です。特にシカは下草を全部食べてしまうので、シカのエサとなる植物が絶滅の危機にさらされています。

没し、農作物を食い荒らしたりします。

そうしたシカを捕獲すると、今度は人間の都合でシカを殺すのかという議論になりますが、徳島県では、年間約一万六千頭のシカが捕獲されています。それをしないとなると、ますます森林が劣化し、人間のみなならず、動植物全体が暮らしていけなくなりそうです。

かつてシカは山で暮らし、人間が生活するエリアには入ってきませんでした。里山を再生することで、シカやイノシシなどの野生動物が本来、自由に暮らせる空間が確保されれば、獣害の被害も減るのですが、実態はよい方向へは向かっていません。

外来種の問題もかなり深刻です。アライグマなどは数を増やしていて、里山の生態系にも影響を及ぼし、また、住居にも侵入して被害をもたら



かつては日本各地で見られた里山の風景

シカの適正密度は一平方キロメートルあたり四〜五頭とされていますが、徳島県の場合は今、四十頭くらい生息しています。約十倍で、超過密状態です。森の木の幹をかじって枯らせてしまったり、食べ物を求めてあちこちに出